

佐渡金銀山「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」世界遺産登録を目指す。

神々しき佐渡が、 ここに ある。



佐渡金銀山は 2010 年 11 月世界遺産候補として世界遺産暫定一覧表に記載されました。

黄金の島、「佐渡」。

16 世紀後半頃から、西洋諸国のアジア進出を背景に海外貿易が盛んになってきました。

当時、取引での決済は主に金銀が使われました。

戦国時代末期から各地で金銀山の開発が盛んになり、安土・桃山に代表されるきらびやかな文化が花開きました。

マルコポーロが東方見聞録で「黄金の国 ZIPANGU (ジパング)」と記しているように、

日本は黄金に輝く国に見えたのでしょ。

その中心を担ったのが佐渡であり、徳川幕府は、相川に奉行所を置き、直轄地として支配しました。

その後、明治になって相川金銀山は、

皇室の所有となり、三菱による民間経営を経て、平成元年にその役割を終えました。

その佐渡が今、再び世界から注目されようとしています。



道遊の割戸 (国指定史跡)
慶長6(1601)年、相川金銀山発見の端緒となった大鉱脈「道遊脈」の採掘跡。江戸時代には主に地表部の採掘が行われたが、明治以降も下部で大規模な開発が行われた。



道遊の割戸 (下部)
頂上の裂け目の間隔は約30m、深さ74mある。



道遊坑坑口
明治32(1899)年、「道遊脈」の開発を目的に開削された主要運搬坑道。今でもトロッコのレールが残っている。



鉱山で使用された鉱石運搬用のグランビー鉱車
昭和30年代よりこの鉱車が使われ始め、道遊坑では20輛前後の鉱車を連結し鉱石を破砕場まで運んでいた。



シクナー
直径50mの鉄筋コンクリート製で昭和13(1938)年頃からの金の増産体制時に建設された。泥状の鉱物を鉱物と水に分離する施設。



北沢浮遊選鉱場
シクナーと同時に、隣接して建設された。最大で月間7万トンの鉱石を処理し、当時「東洋一」と言われた。